

為「彈琴之師」。能「管絃」之人也。

貞保親王に藤原興風、いわば天下の管絃の名手が二人までうちそろって、この五十歳の賀は、なかなかでにぎやかであつただろうと思うのである。

それより先、元慶六年三月二十七日には、高子の四十歳の賀が宮中で行われていた。『三代実録』は、そのときのことを次のように記している。

天皇於「清涼殿」。設「秘宴」。慶賀皇太后四十之筵也。皇太后去年春秋滿四十。天下遏密。不申「歎讌」。故延而行之。

「天下遏密」は清和天皇の諒闇をさしている。天皇は、元慶四年十二月五日に崩じた。業平も同じ年の五月二十八日に死んでいる。そうしたことのつづいた後、高子の四十歳の賀は、忌の明けのを待って、清涼殿で行われたのである。「秘宴」とあるが、天皇は内蔵寮に命じて衣被酒食をつくしている。献物供具は数えきれないほどであつたという。親王も公卿もみな宴に侍し、童子十八人がかわるがわる殿前で舞った。その中で、ひとときわ人目をひいたのは、在原行平を外祖父とする貞数親王の陵王の舞であつたという。行平は、その舞が終わると、喜びのあまり躍り出て、その時八歳であつた親王を抱持すると感涙にむせんだという。宴は夜に入つて、ますますたけなわになってゆくのであつた。

た。

あるいは、高子のために催された、高子の宮廷生活中の最大の晴の場であつたかもしれない。しかし、私には、このときの『三代実録』の記録からは、高子の顔がどうしても浮かんでこないのである。すべては、おそらく、基経による政治の一環として行われたはずのことであるとも思われる。

「竟酒之後。賜「禄有差」と『三代実録』は記している。

陽成天皇の退位は、このときからみても、やはり二年たらずの後のことであつた。

さて、この高子の四十歳の賀に対して、寛平三年の五十歳の賀は、二条院で行われたのである。いわば私的に行われたといつてよいであろう。陽成天皇退位より七年の後の日のことであつた。興風の歌はおそらくその賀宴が、さくら花のちる春のある日のことであつたことを思わせる。この年は、一月十三日に基経が死んでいる。五十六歳であつた。そのことも思い、二条院において私的に行われたことも思えば、このときの賀宴こそ、「秘宴」と呼ぶべきことであつたと思う。しかし、ここでは、高子の顔の見える気がするのである。高子の部屋も、その桜の散る屏風の絵も、屏風の絵を題として歌を詠めと注文している高子の顔も、歌を奉る興風と、その歌を賞める人々の顔も見える気がするのである。宴があり、管絃が奏でられるのであつた。そして、この賀宴に召され、参列した人々の中に、わたしは、ほとんど間違いなく、幽仙も、幽仙の弟子で東光寺の座主となる善祐もいたはずだと思ふのである。

貞保親王は、南院とも南宮とも呼ばれて、二条院のすぐ近くに住んだ。高子の晩年は、その貞保親王をはじめ、高子の生んだ皇子たち、敦子内親王をはじめとする皇女たち、また源姓を賜って臣下に下った人たちがしばしば二条院を訪れたし、宮廷からも解放されて、私的で自由な生活を営んでいた。そういう意味では恵まれた日々であったかもしれないが、しかもなお、暗いかげがつきまとう。

陽成天皇の退位後の乱行のことが、『扶桑略記』寛平元年十二月二日のところにみえる。

太上天皇御此郷。備後守藤原氏助之宅御在所也。率若干從卒。乱入此宅。家人士女。或遁亡山沢。或逃迷道路。氏助之宅無一人。此為狩取安倍山猪鹿也。而夜以松火炬。時臨暮之間。還御此宅。但率童子十二人。厩舍人二人。悉着武装。帶弓矢。相分前後。騎馬行列云々。

このように記述も甚だしい。

陽成天皇は気性が荒かったとされ、その在位中にも、源朝臣蔭之男益を殿上において格殺したという記事が『三代実録』に実際にあったりもするが、角田文衛氏は、『王朝の映像』の中で、「源益を格殺したのが事実であったとしても、それは遊び相手と相撲をとり、打ちどころが悪くて益が死んだと言った、過失致死程度のことであつたかも知れない。」「遜位前の陽成天皇の所謂『乱行』などは、い

かにも少年らしい乱暴さに過ぎず、大人が真面目に採り上げるような種類のものではない。」と述べられている。

あるいは、退位後の陽成天皇の乱行を必然化するものとして、史書の記載をみることもできるのではなからうか。私のひそかな憶測は、上皇の乱行は、もしそれが事実であるとすれば、その気性によるものという以上に、退位に追いこまれたことに端を発するものであり、無謀とはいえ、一種の抵抗ではなかったかということである。そして、そのように考えるとき、それは、晩年の高子の幽仙・善祐とのひそかな乱れと一つにつながってくるものがある。

高子は東光寺を建てた。その事は『類従三代格』延喜五年三月九日の条にみえる、

件寺在山城国愛宕郡。元慶年中依大后御願所建立。

とあるのによって明らかである。元慶年中とあるから、高子の五十歳の賀の寛平三年には東光寺はすでにできている。高子は出家しなかったといわれるが、信ずべきものではないにしても、『古今和歌集隠名作者次第』は、出家した高子の歌として二首をあげている。かりに出家しなかったとしても、二条院にいるいわば自由の身の高子にとって、東光寺への出入りは、日常のことに近いことであつたかもしれない。そこで幽仙と近づくことも不思議なことではない。

東光寺の建立は、幽仙が高子の依頼によって推進したことであつたらしい。太政大臣藤原総経の孫

であり天台座主にまで昇る幽仙であるが、『古今集』にも二首歌を残している歌人でもあった。歌の好きな高子は、そうした面からも幽仙と気の合うこともあったであろう。そういう幽仙であってみれば、高子の五十歳の賀にも召され、参列したと考えることは自然なことではなからうか。『古今集』には残されていないとしても、幽仙も興風らと共に高子に歌を奉ったことであろう。そしてそうだとすると、高子の五十歳の賀は、いよいよ公を離れて、私的な色彩を濃くしてくるのであった。

『扶桑略記』は、昌泰二年十二月十四日の記述に、律師幽仙延暦寺別当の月林寺における入滅^(注2)を記しているが、高子との関係を次のように加えている。

世謂、先是竊通高子皇后。云々。

私は、幽仙が、東光寺をその座主として比較的早く善祐^(注3)に譲るのはなぜであったかと考えるのである。それは、『扶桑略記』が告げるような高子との関係のさらにつづくことを恐れたためなのか、逆に高子とのそうした関係はなかったことの証拠なのか。すべては不明のまま、何らかの関係のあったことは、否定しえないように思われる。

寛平八年九月、高子と善祐との関係は明らかになる。『帝王編年記』は次のように記している。

同八年丙辰九月、陽成太上天皇母儀皇太后高子与東光寺善祐法師竊交通。仍廢后位。善祐流。

伊豆国。

幽仙が高子から逃げたのではないかとも思うのは、こうしたことがあるからである。善祐は生涯伊豆から帰れず、そこで死んだと伝えられる。もし幽仙が逃げたのであったとすれば、それは、高子の廢位を予感し、高子を守ることを思っていたであろうか、それともみずから善祐のごとく京から追われることをおそれたからであったろうか。それとも幽仙の身内に流れる高貴な血が、彼を臆病にした、あるいは自重せしめたがためであっただろうか。

しかし、幽仙のことはもちろん、善祐のことにつくられた世評だという説がある。それは、陽成天皇の復位をおそれたことであつたと。そうだとすると陽成天皇の退位後の乱行も、また権力者によつてつくられた無根に近い話であつたかもしれない。高子と、陽成天皇・貞保親王・敦子内親王たちをはじめとする母子たちは、そういう冷たくつくられてゆく世評と雰囲気の中で、耐えて自由を生きたのであろうか。

いまの岡崎神社は、東光寺の跡だという。平安神宮に近くあるこの神社は、平安神宮に比べるとごく小さな神社にすぎない。しかし、その石の鳥居を一步入るとき、境内に満ちてただよう一種の妖艶な気配におどろくのである。正面の奥にやや高く、大きな社殿が、大きな青銅の屋根を負っている。神域は深閑として一つのまとまった庭である。そこにある木々の緑が、社殿の屋根の青銅の色とともに

に境内を青々としているのである。池があり、石道が白く浮かぶ。どこかに漂とした気品のある妖艶さの中に、ほとんど訪れる人はいないのである。私は、高子を感じて立つのであった。

「鶯のこはれるなみだいまやとくらん」——ここまでくれば、高子の心中の涙を「こはれるなみだ」に重ねて読まざるをえないのである。春になり、鶯の水れる涙は解けることであろうが、高子の涙を重ねてみれば、「いまやとくらん」には、願いが、祈りがあるのかもしれない。生涯何を苦しみ、何に耐えてきた高子であっただろうか。何にいためつけられてきた高子であっただろうか。陽成天皇をはじめとする子供たちに囲まれながら、なお孤独に、人しれぬ涙を流す高子の姿態には、女のこころの妖艶がにじみでている。

契沖は『古今余材抄』に、この高子の一首の詞書に触れて、「この延喜時代にては、奏覧の本に、二条の后と書くべきにあらず」と指摘している。高子は、延喜十年三月二十四日に薨じたが、それからお三十三年も後の天慶六年になって本位に復している。香川景樹も『古今和歌集正義』で、この詞書に触れ、「復位の後に書き改めしならん」といって、高子が后を廃せられていた期間の延喜五年の奏覧の『古今集』には、詞書に「二条のきさき」のことがなかったとする見解が大方の一致するところとなっているようである。おそらくこの歌は、延喜奏覧の『古今集』では「よみ人しらず」の一首として採録されていたにちがいない。高子の悲劇は、そうした採録のされ方の中にこそ、象徴されるものであっただろう。

詞書採録の事情がわかれば、この一首がいつの作品であるかということも、もうわからなくてよいのであろうか。少なくとも、高子が、春宮の御息所と呼ばれた日々のある日の作品ではなく、それより後「二条の后」と呼ばれるようになってからの作品であった。そして、私にはなぜか、それは、おそらく、高子の五十歳の賀の前後の作品のように思われてくるのである。

〔注〕

- 1 春の雪を詠んだ歌は、『万葉集』にすでにみえるところである。
- 2 『華頂要略』によれば、幽仙は、昌泰三年二月二十七日月輪寺の馬場で落馬して、六十五歳で死んだことになっていて、『扶桑略記』の記事とその月日がちがっている。
- 3 仁和のはじめのころからであろう。